

あの山

—我が夏は永久にめぐりぬ。パティオにて—

北村
想

登場人物

キャロル・ハリスン（セント・オハラ精神治療院に赴任してきた看護婦。不思議な導きの囁く声を聞く）

声（キャロル・ハリスンに話しかける導きの女性の声。何者かは不明）

おじさん（セント・オハラ精神治療院の用務員を自称）

おばさん（おじさんの妻らしい。セント・オハラ精神治療院の下働きを自称）

クエスト・エル（元女優と自称。患者なのか看護婦なのかはわからない。厭世な世界観を持つようで

いて、1000年の命を希求するロマンチストでもある）

ペーカ・レイン（パティオの花壇管理者を自称。もともと、その花壇がどこにあるのかわからない。

彼女は名前の通り、雨を呼ぶことが出来るようだ）

ハンス・トルフ（無眠症を自称する16歳の少年。好奇心が旺盛）

ブレンド・デイ（ハンスの友人。ハンスよりは年上にみえる。何の病気かは不明だが、ハンス・トル

フと同じ、医師でも看護師でもなく患者であることに間違いはナイ。大飯食いらしい）

ノーマン・バクシー（牧師を自称。一見呑んだくれている陽気な男にみえるが、独自の宗教理論を説

く）

ライト・ユード（ジャーナリストを自称。生真面目で暗い性格だが、ノーマン・バクシーとは馬があ

って、よく話をしている。仏教に傾倒しているようだ）

スー・ルー（ただ、パティオをさまざまなコスチュームで通り過ぎていくだけの謎の人物）

ヤマモト（ドクター・ヤマモト。つまり医師だと自称する男。本来、白衣を着ない規定を設けている

オハラ治療院にあつて、白衣を着ているというところからして、怪しい）

1の目

これはオハラ精神治療院という架空の施設で起こった物語である。
時代は、いまより古いと想定される。(看護婦という呼称が使用されているところから
推し量ると)。

国籍は、不詳。(というより無国籍な設定がしてあるとあってよい。登場人物が日
名でナイのはそのためである)

すなわち、物語はすべてが虚構であるのだが、問いかけていられることはすべて、
真実
に向けてのものである。(と、これはまあ、作者の気負いだけども)

セント・オハラ精神治療院の院内のパーティオで、この物語は演じられる。

パーティオ、ただ、薄緑の芝生らしき場所。

入り口にはアーチと石の階段がある。

あとはフラットな芝生の中庭。

椅子や机はなく、同じような薄緑色の、立方体が幾つか転がっていて、人々はそ
れを机
や椅子の代わりに使用している。

季節は初夏。これは、日本のそれに該当する。

場面の進み方(構成)は、チェスのポーン(西洋将棋の歩)の動きにあわせてあ
る。
そこにいま、中年の男女が現われた。

男は使用人らしい出で立ちで、女は賄い婦のような格好をしている。

男をおじさん、女をおばさんと呼ぶことにする。

なぜなら、彼と彼女は、ここで、そう呼ばれているからだ。

おばさん 2×3は。

おじさん 6。

おばさん 4×6。

おじさん ・・20・・23・・24、24。

おばさん 7、7。

おじさん うっ、7、7、・・40・・6。

おばさん 49。

おじさん ああ。

おばさん 12、3×9、2は。

おじさん ええっ！

おばさん 113、16。

おじさん スゲエ。

おばさん バカだね、出鱈目いってるだけなら、どうするんだい。

おじさん あつ、そうか。

何のための掛け算なのかワカラナイが、そんなふうなことをしながら、彼らがパ ティオを通り過ぎると、パティオの入り口階段付近に、アーチを抜けてキャロ ル・ハリスンが姿を現す。

おそらく照明は、ゆつくりと暗くなり、キャロル・ハリスンだけが舞台に浮かび 上がる ことだろう。

どこからか、誰なのか、老いた女性の声が聞こえる。

それは、キャロル・ハリスンだけに聞こえているのだ。

その声に、キャロル・ハリスンもまた、ココロの中で答える。

声 キャロル、キャロル・ハリスン。

キャロル・ハリスン はい。(これはココロの声であるから、実際に彼女がその場で応答しているのではナイ)

声 そこは、あなたの新しい赴任先です。オハラ精神治療院、それが、その施設の名称です。オハラ・シヨースケ財団が設立して、その後も、経済を全面的に援助しています。その名前の示す通り、そこは、精神、ココロを病む人々の治療の施設なのですが、一種のサナトリウムと考えるも らっていいのです。

キャロル・ハリスン(ココロの声) サナトリウム。

声 解放治療の療養所です。部屋に鍵はなく、窓に格子はなく、施設と外界を分かつの高い塀も柵も堀もありません。医師も看護婦も白衣は着用していませんから、最初は誰が医師や看護人で誰が患者なのか、戸惑うことでしょう。しかし、それらは、その施設の方針であり、主義なのです。癒す者と癒される者の区別をなくす。治す者と治される者の区別を取り払う。それは、支配と被支配の関係を払拭してしまうものです。

キャロル・ハリスン(ココロの声) 危険なことはないのですか。

声 開設以来、何の事故も事件も起こってはいません。人々は、互いの信頼を頼りに生きています。もつとも、凶暴な重病人は施設にはおりませんから、電気ショックや鎮静剤に頼ることはないのです。

キャロル・ハリスン(ココロの声) すると、そこで私はどんな仕事をすればいいのでしょうか。

声 それは、あなたがみつけるのです。

キャロル・ハリスン(ココロの声) 私が。

声 そうです・・・キャロル・ハリスン、あなたの正面に山がみえますね。

キャロル・ハリスン(ココロの声) はい。

声 あの山の中腹あたりに、その施設があります。あなたはそこに行くのです。そこであなたは、常に新しく、また昔と同じに変わらないひとでありなさい。まず婦長に会いなさい。挨拶をすれば 的確な指示があるでしょう。そうして、仕事を、あなたの仕事をみつけないさい。

キャロル・ハリスン(ココロの声) あの山ですね。

声　そうです、あの山です。さあ、お行きなさい、キャロル・ハリスン。

溶暗して。

3の目（ポーンは3の目まで最初は飛べる）

溶明する。

中央で、女性が、仰向けになり、手枕で寝ころがっている。

まるで空でも観ているかのように。

その傍らに、少年が二人立っている。

彼らは、その女性の話を聞いているらしい。

女性の名はクエスト・エル。少年のひとりにはハンス・トルフ、いまひとり背の高　いほう

がブレンド・デイ。

キャロル・ハリスンは、まだ入り口付近に佇んでいる。

クエスト・エル　人類が減んでしまう前に、私が亡ぶなんて、イヤだね。だから、私は人類が減ぶのを見届けてから亡びたいんだ。私なき世界はナイ、そうして世界なき私もまたナイのだ。世界よ憂愁の美を我ともにせよ。

ハンス・トルフ　それって、何年くらい先のことなんでしょうか。

クエスト・エル　そんなに先のことじゃない。人類の存続はアト500年から1000年が限度だろうっていわれている。

ハンス・トルフ　えっ、

ブレンド・デイ　そんなに短いのに。

クエスト・エル　そうだよ。恐竜のように何百万年も存在するワケじゃない。だから、アト1000年でいいんだ。アト1000年、私を生かしておいてくれるなら、私は悪魔に魂を売ってもいいと思うている。

ハンス・トルフ　短いですね。

ブレンド・デイ　短いよ。

クエスト・エル　短かったって、ひとの寿命はせいぜい80年、長生きしたって100年やそこらじゃないか。そのほうが、余程短いよ。

ブレンド・デイ　そりゃ、そうだけど。

ハンス・トルフ　あの、僕、冷凍睡眠だから、人間を凍らせて何百年も生きつつづけさせる技術があるって聞きましたけど。

クエスト・エル　あるようだけど、眠っているあいだは、この世のことがなんにもワカラナイんだったら、意味ないね。私は、人間、人類が減んでいくさまが観たいんだ。それにおつきあいしたいのさ。

ハンス・トルフ　いろんな予言者が、人類滅亡の予言をしてるじゃないですか。

クエスト・エル 全部、ハズレてるけどね。

ハンス・トルフ ハズレてるんですか。

クエスト・エル だって、何事もなく人類は生きてるじゃないか、まだ。

ハンス・トルフ そうですね。

ブレンド・デイ この先、アタリそうなのはナイんでしょうか。

クエスト・エル ナイね。

ハンス・トルフ そうすると、秦の始皇帝のように、不老不死のクスリを捜すしかないですね。

クエスト・エル ああ、そういう話があったね。日本に来たんだろ、そのクスリを求めてなんとかとかどうか。

ハンス・トルフ 徐福っていうひとです。徐福伝説という、日本渡来の伝説が残っているそうですよ。クエスト・エル ふーん。

ブレンド・デイ それで、5000年から10000年して、人類が滅亡して、地球はどうなるんですか。ハンス・トルフ 地球は、2億2500万年前はひとつの大陸しかなかったんだ。パンゲア大陸って

名前で、先カンブリア、カンブリア、オルドビス、シルル、デボン、石炭、二畳紀、三畳紀まで、この大陸は続く。それが8000万年前に分裂して現代のようなカタチとよく似た大陸が出来たらしいんだけど、それまでに、三回、生物は大量絶滅を起こしているんだ。恐竜が出現したのは、そのアトだよ。

ブレンド・デイ さあ、始まりは始まり、ハンスお得意の教養講座だ。

ハンス・トルフ このアトって、つまり現代よりアトだけど、だいたい2億年後くらいまでは予想がついているらしい。5000万年後は氷河期で、1億年後にそれが終わる。2億年後は、分かれていた大陸がまた一つになって、第二パンゲアが生まれる。海はひとつ、地球海と呼ばれる。いまは白亜紀の大量絶滅、つまり恐竜の滅亡のアトの人類、哺乳類の時代、新世代だけれど、氷河期の来る前にまた大量の絶滅があるだろうといわれている。そのアトは氷河期が終わって地球は温暖化して、さらに大量の絶滅があつて、さつき、いった第二パンゲアになる。その時の知的生命体は、メガスクイッドと呼ばれる象のような陸上イカと、スクイボンといわれる森林生物。これもイカの子孫だって、いわれてる。

ブレンド・デイ 2億年。ああ、気が遠くなる。

クエスト・エル イカねえ。

ハンス・トルフ イカです。

クエスト・エル スルメでしょ。

ハンス・トルフ はい。

クエスト・エル 知的生命体は、スルメさんか。

三人、ため息つきつつ、空をみつめる。

クエスト・エル 雲が飛んでいく。あれは、雲が流れているのだろうか。それとも時間が流れているのだろうか。時の流れが目に見えるほど虚しいものはナイ。

ハンス・トルフ あ、それ、独り言ですか。

ブレンド・デイ それとも、僕たちへの問いかけですか。

クエスト・エル 独り言の問いかけさ。私が私自身に対して、問いかけてるのさ。

ハンス・トルフ 難しいですね。

クエスト・エル いまのは、昔演じた芝居の中の台詞さ。

ハンス・トルフ ああ、そうですね、クエストさんは女優だったんですものね。

ブレンド・デイ 他に何か、いい台詞、おぼえてらっしゃいませんか。

クエスト・エル ブレンド・デイにハンス・トルフ、君たち二人を観客にして、この元大女優クエスト・エルに何か演じろというのかい。

ハンス・トルフ いえ、そんなだいそれた事じゃないです。

クエスト・エル (とはいえ、演じてみせる) ひとつというのは、ほんとうは無意識のうちに早く死にたいと思っているのよ。そう願って生まれてくるのよ。生きることなど些細なことだけど、生き

ようとして地獄を歩くことは些細なことではないから。・・・なんてね、そんなのもあったっけ。

ブレンド・デイ 哀しい台詞ですね。

ハンス・トルフ でも、さっきのコトバと反対ですね。早く死にたいだなんて。

クエスト・エル 私自身はそんなふうには思っていないさ。だから敢えて逆の立場の台詞をいつてみたのよ。いろんな人間、いろんな私がいるからね。でも、どんな私も、私というのはひとつの物語でしかないのよ。そうすると、神さまというのは演出家ね。脚本家ではナイの。何でなら神さまは物語なんざ書きはしない。私という物語の演出家よ。だけど、どういうふうに物語が書かれてあっても神さまらしい演出はするのよね。それはね、彼こそが物語の原作者だから。わかる？

ハンス・トルフが、入り口にいるキャロル・ハリスンを認めた。

クエスト・エル 誰か、お客だね。(起き上がって、キャロル・ハリスンをみた)

キャロル・ハリスン (近寄ってきた)

クエスト・エル 新参のひとかい。

キャロル・ハリスン キャロル・ハリスンといいます。赴任してきた看護人です。

ハンス・トルフ 看護婦さんか。僕、ハンス・トルフです。こんにちは。

ブレンド・デイ 僕はブレンド・デイ。こんにちは。

クエスト・エル 私は、クエスト・エル。

お互い、握手を交わすが、キャロル・ハリスンにまたあの声が聞こえる。

声 まず婦長さんをお訊ねするんですよ。ちゃんと婦長さんに新任のご挨拶をなさい。

キャロル・ハリスン (声のあいだはふと空に視線を向けるが、降ろすと) あ、婦長さんは何処に。

クエスト・エル 婦長・・・さて、何処かしら。

ハンス・トルフ 婦長さんに会いたいんだね。いいよ、僕たち捜してきてあげるよ。
ブレンド・デイ ああ、ここで、待っておいでよ。
キャロル・ハリスン そう、ありがとう。

ハンス・トルフ、ブレンド・デイ、去った。

キャロル・ハリスン (クエスト・エルに) あの、
クエスト・エル うん、ああ、そうね、あなたは患者？看護人どっちって聞きたいのね。新参のひとは必ずそう問うわ。でも、それは、おいおいとわかることよ。

キャロル・ハリスン いえ、女優さんでいらしたんですね。

クエスト・エル ああ、聞いてたのか。そう、クエスト・エルというのは芸名でね、本名はその逆のエル・クエストというの。

キャロル・ハリスン どっちでお呼びすればいいんですか。

クエスト・エル クエスト・エルでいい。ミス・クエスチョンというのがあだ名。特に意味はナイらしいんだけど。よく、ひとに質問するらしいんだって。

キャロル・ハリスン ミス・クエスチョン、私、舞台や映画の鑑賞が趣味なんです。

クエスト・エル (不思議にあんまり気乗りしてない) あらそう。

キャロル・ハリスン どちらに多く出演されてたんですか。舞台ですか、映画ですか。
クエスト・エル うん？・うーん、そうね、どっちも・・・最初は舞台かな。で、だんだん映画

の仕事が多くなつてと。そうそう、いろんな映画祭に行ったなあ。モスクワ国際、カルロビバリ国際、ウィーン国際、オーバーハウゼン国際、トリノ国際、ロカルノ国際、ロッテルダム国際、

ロンドン映画祭、サンセバスチャン国際、そうして、カンヌ、ベネチアにベルリンよ。

キャロル・ハリスン 国際ばかりですね。

クエスト・エル そうよ、ところがね、オマーンという名前の小さな国があつてね、そこは国際とは
いわなかつたの。世界オマーン映画祭っていつてたの。何でかわカル。

キャロル・ハリスン さあ。

クエスト・エル オマーンに、国際つけてごらんよ。

キャロル・ハリスン オマーン・・・あの笑っていいんでしょうか。

クエスト・エル まあね。

キャロル・ハリスン でも、嘘でしょ。

クエスト・エル 何が。

キャロル・ハリスン クエストさんが女優だったっていう話。

クエスト・エル ふーん、イヤにはつきり断定的に否定すんだね。根拠は？

キャロル・ハリスン だから、いったじやないですか、私、映画や舞台を観るのが趣味だったって。

クエスト・エル それで。

キャロル・ハリスン クエスト・エルなんて名前の女優さん、一度も観たことも聞いたこともありません。

クエスト・エル・・・そうね。まあ、白状しまうと、つまり端役さ、端役が多かったの。映画では大部屋というヤツ。芝居ではガヤというヤツ。自分がどんなタイトルの映画に出てるのすらワカラナイこともあったねえ。道中の通行人の役が終わったら、大急ぎで着替えて、大奥のお女中。次が夜鷹、そいで、今度は乗合バスの乗客。舞台では、バックでコーラス歌ってたなあ。あのね、この驚愕すべき真実は、あの少年たちには内緒だよ。夢を壊すことになるからね。

キャロル・ハリスン はい。でも、さっきの台詞はステキでしたね。

クエスト・エル ああ、あれはもちろん、私がいって台詞じゃないけどね。

キャロル・ハリスン 私なき世界はナイ。世界なき私はナイ。いいですね。

クエスト・エル ああ、その台詞、好きなんだ。

キャロル・ハリスン 世界って何ですか。

クエスト・エル (しばし、キャロル・ハリスンを凝視して) あんた、ほんとに突っ込みで質問するね。これじゃ、私はミス・アンサーになっちゃうじゃないか。あのね、世界の「世」というのは空間のこと。「界」は時間のこと。これね、もともとは仏教のコトバなんだってさ。

キャロル・ハリスン そうなんですか。

クエスト・エル 私も聞いただけなだけどね。ライト・ユーフという、ここに住んでる自称ジャーナリストにね。

キャロル・ハリスン でも、私が質問しているのは、そういうんじゃないかって、世界って何なのでしよう。

クエスト・エル そういうんじゃないかって、あっても、世界は世界。宇宙の出来る前は世界も、つまり時間も空間も無かったんだってさ。

キャロル・ハリスン そうなんですか。すると、宇宙と一緒に世界と私が出来たんですね。

クエスト・エル ますます大胆なこというね。

キャロル・ハリスン そうですか。

クエスト・エル まあね、そのジャーナリストにいわせるとき、いい、私の限界と、世界の限界というのとは一緒なんだってさ。ワカル？

キャロル・ハリスン ああ、私と世界が一緒のものなら、理屈ではそうなりますね。

クエスト・エル こりやまた簡単に納得しちゃったわねえ。まあ、いいわさ。つまりさ、ここに私の壁があるとすると、それは世界の壁である。と、そういうこと。

キャロル・ハリスン タイ張ってるんですね、私と世界。

クエスト・エル そうそう、そういうことよ。私と世界はタメなのよ。

キャロル・ハリスン 私には私の世界があって、ひとにはひとの世界がある。すると、私の世界と、クエストさんの世界は違うんですか。

クエスト・エル うーん、そういうの、どうだろう。まあ、あんたと私は違うけど。

キャロル・ハリスン じゃあ、この、私とクエストさんを取りまく、この外の世界は、何の世界。

クエスト・エル だからね、そういうことをさ、いつも私が聞くんだよ。それで、ミス・クエスト君なんて呼ばれているワケ。でも、それは、哲学の永遠の課題だってさ。

キャロル・ハリスン 哲学の。永遠の。

クエスト・エル そう、あんまり考えたくないな。

スー・ルーと呼ばれている、この住人が、あるコスチュームで、通り過ぎる。

キャロル・ハリスン あの方は。

クエスト・エル スー・ルー。コスプレフェチの謎の怪人。

キャロル・ハリスン じゃあ、患者さん？

クエスト・エル さあ、どうだか。

溶暗。

4の目

溶明。

自称牧師のノーマン・バクシーと、ジャーナリストのライト・ユーノが、立方体 三つを占拠している。立方体に腰掛けながら、ひとつを机にして、チェスをして いるのである。

シヨットグラスで、ウイスキーをやりながら。

ノーマン・バクシーは、退屈そうに、ライト・ユーノは深刻そうに。

キャロル・ハリスンは、離れた位置で彼らの様子をみている。(つまり話を聞いて いるといってもいい)

ノーマン・バクシー ライトくん、君の番ですよ。

ライト・ユーノ ええ、わかっています。

ノーマン・バクシー 忘れてるのかと思つてね。考える時間があまりに長いもんで。いや、それは特にどうだつていい。ここには時間は有り余るだけある。私も、いまはそれにつきあえるだけの余裕がある。酒があるうちは、だけどね。

ライト・ユーノ 酒くらい、無くなつたら捜して持ってきますよ。持ってきますが、ノーマンさんは聖職者でしょ、一応。

ノーマン・バクシー 私が聖職者であることも、浴びるように酒を呑むことも、今日に始まったことではありません。そおんなこと、ライトくん、君はとおに知っているだろう。ライト・ユーノ ええ、まあ。しかし、

ノーマン・バクシー 何故、そうなったのかについては未だに知らない。んで、そろそろそのワケが知りたいと、君のジャーナリストとしての血が騒ぐ、のかね。

ライト・ユーノ そりゃね、騒がずでもナイですが。

ノーマン・バクシー だいたい、君は、チェスの手を考えているのかい。

ライト・ユーノ 考えてますよ。

ノーマン・バクシー ついでにじゃないだろうね。

ライト・ユード 半々ですがね。

ノーマン・バクシー ちっ、やな性格だなあ。陰険、インキン、痒くない？

ライト・ユード インキンじゃありません。陰険でもナイです。

ノーマン・バクシー そうか、じゃあ、今日は私の信念について語るとするか。

ライト・ユード 信念ですか。

ノーマン・バクシー そうだよ。G・K・チェスタートンがごとく、その華麗なるパラドキシなレトリックに似て、私が牧師であるということ、飲んだくれであることはまったく矛盾しないという論理を語ってみるか。あまりにも相手の考慮時間が長いで退屈のままにだけどね。

ライト・ユード 偉いひとを持ち出しましたね。チェスタートンですか。しかし、あつちは、カソリックじゃありませんか。ノーマンさんは、プロテスタントでしょ。

ノーマン・バクシー どっちでもいいんだよ、私にとっちゃ、そんなこたあ。正統か異端か、なんて問うのがすでにダメなんだなあ。異端は正統を正統にして、正統は異端を異端にしているだけのことじゃないか。どっちもどっちさ。まあ、私がプロテスタントであるのは巡り合わせのようなもんだな。どっちも同じへブライ宗教なんだから。ギリシャ思想と比肩しうる、というか、二大ヨーロッパの思考の流れのひとつが、兄弟アイ仲良く分派して、あるいは闘争していると、それだけのことさ。

ライト・ユード で、その二大思考の片割れであるへブライ宗教と、飲んだくれが矛盾しないという理由（ワケ）は。

ノーマン・バクシー ライトくん、君、問い方もジャーナリスティックだな。

ライト・ユード そうですか。

ノーマン・バクシー 厭味をいつているんでもナイ。非難しているのでもナイ。あのね、興味の引き出し方が上手いと称賛してるんだよ。誤解しないでくれよ。

ライト・ユード どうも、お褒めにあずかって恐縮です。（と、一手指した）

ノーマン・バクシー （その手をみて、すぐに自分の駒を動かす）長考必ずしも好手を生まずだな。なんだい、そのつまらない手は、何か作戦でもあるのかい。

ライト・ユード いや特には。さてと、難しい局面ですね。また考えなければならぬみたいです。聞きたいですね。今度の長考の間に聞かせてくれませんか。チェスタートンも裸足で逃げ出す、聖職者と飲んだくれの矛盾なき関係を。

ノーマン・バクシー 上手い。実に上手いキャッチだな。いや優れたキャプションであります。まあ、あんまりもつたいぶらずに、では、話しましょう。

キャロル・ハリスが、二人に近寄ってきて、芝生の上に直に座った。二人は、キャロル・ハリスを一瞥するが、特に興味を示すワケではない。

ノーマン・バクシー 聖職者も飲んだくれも、どちらも役立たずである。よって矛盾なし以上証明終わり。

ライト・ユード 何ですか、それは。

ノーマン・バクシー 聞いてなかったのか。聖職者と、
ライト・ユーン 飲んだくれは役立たずですか。

ノーマン・バクシー そうだよ。

ライト・ユーン それが、どちらも役に立たない存在であるというので、同じようなものであると、
そういつているんですね。

ノーマン・バクシー さすがジャーナリスト、要点のまとめがいいね。

ライト・ユーン お褒めにあずかるのはもう結構ですよ。まあ、私も飲んだくれが役立たずというのはわかりませんが、聖職者のほうもそうなんですか。

ノーマン・バクシー 然り。君はルイス・ブニュエルの『ナサリン』という映画を知ってるかい。1
958年の作品だ。モノクローム映画だが。

ライト・ユーン ああ、内容は殆ど忘れましたが、あれにもたしか、神父だか牧師だかが主役で出て
きましたね。

ノーマン・バクシー そう。ロード・ムービーというか、ナサリン神父だか、牧師だかが行くところ
事件あり、解決ナシ。つまり、いろいろな事件に遭遇して、頼りにされるんだが、なにひとつ解
決できる力量がナイんだな。最後は留置所にぶち込まれて、同部屋の悪人にいわれるんだ。くあ
んたも俺たちとおんなじだ。どっちもこの世じゃ役立たずさくとね。ラストシーンは、重い打撃
器の聞こえる暑い夏の道をナサリン神父が歩いていく。太鼓の音、それが、彼の苦悩と前途の苦
難を現すごとくに聞こえる。まるで、ボディブローのような映画だなありや。

ライト・ユーン ボディブロー。

ノーマン・バクシー アトから効いてくるんだわ。ふっふっふ。

ライト・ユーン その主人公というのは、そうですね、たしかにあの映画の中では何の役にもたちま
せんでしたね。周囲の期待を裏切るように。

ノーマン・バクシー そう、あれが、本来の聖職者の姿だ。神に仕える者の本質さ。

ライト・ユーン しかし、それは、突き詰めて言い換えれば、「神」というのは役立たずだといって
ることになりませんか。

ノーマン・バクシー そうだよ。それは私のいまの定義から導かれる、当然の論理的帰結だよ。

ライト・ユーン 論理的帰結によると、神は、役立たずなんですか。

ノーマン・バクシー 役に立つと思っっているのかね、君は。

ライト・ユーン いや、役に立つとか、役に立たないとか、そういう対象ではナイでしょう。神とい
うヤツは。

ノーマン・バクシー じゃあ、何の対象だい。

ライト・ユーン 神というのは、認識の対象ではなく信仰の対象でしょう。

ノーマン・バクシー ほほう、では、ひとは何故、神を信仰する。

ライト・ユーン 少なくとも役立たずではないからでしょう。

ノーマン・バクシー (笑う) それだ、それが、ダメなんだなあ。宗教の一切の間違い、すべての誤

謬の根源はそこにあるんだ。(一呼吸入れて) いいかい、ライトくん。神が役に立つと思っ
てなされてきたものがこの世にひとつあるんだが、何か、わかるかい。

ライト・ユード (しばし、考えるが) まさか、戦争だというんじゃないでしょうね。

ノーマン・バクシー ビンゴ。わかってるじゃないか。さすが、ジャーナリストだ。神が役に立っているのは、戦争の時だけだ。神のために闘う。闘うために神に祈りを捧げる。聖なる闘いだ、死んだら天国だ。そういうことを考えるのは何億という種類の生物のうちで人類だけだね。ヘブライの神が、その後分裂して兄弟喧嘩のように戦争をしてきたのは周知の事実だ。イスラムだって元はヘブライだよ。だから、私は、ある時、180度この神というものについての考え方を転換した。即ち、神というのは、とことん役立たずでなければならぬと。

ライト・ユード 飲んだくれのようにですか。

ノーマン・バクシー そうだ。神さまなんてのは、飲んだくれみたいなものだよ、と、そう人類が思い及ぶようにならないと、ダメなんじゃないかね。

ライト・ユード 面白い意見ですね。

ノーマン・バクシー 酔どれの我田引水かい？

ライト・ユード いえ、コペルニクスの転換です。

ノーマン・バクシー 神さまなんて何にもしてくんないよ。

ライト・ユード じゃあ、神が存在するとして、存在する価値があるとしたらですが、そのですね、人間は何故神を求めるんですか。

ノーマン・バクシー 知らないからだよ。

ライト・ユード 役立たずだってことをですか。

ノーマン・バクシー そう。だから、それを教えてやるために私のような者が必要になってくるんだなあ。

ライト・ユード 役立たずなモノが何で、世界を創ったりしたんです。

ノーマン・バクシー 役立たずでいいからじゃないのかな。

ライト・ユード どういうことです。

ノーマン・バクシー 世界も私も役立たずでいい、そういうことを知らしめるには、神そのものが役立たずでなければならぬんだ。みいんな役立たず。あなたも私も役立たず。どうだね、素晴らしい世界じゃないか。

ライト・ユード 次のコトバに困りますね。

ノーマン・バクシー 私は、コトバに困ったことなんかないね。よし、なんなら牧師らしく、聖書に基づいて語ってもいい。マチウ書第20章、葡萄園の労働者の話は知っているかい。

ライト・ユード なんてしたっけ。
ノーマン・バクシー 天国とは、自分の葡萄園で働く労働者を雇いに夜明けに出ていった主人に似ていると、イエスが説くところだ。

ライト・ユード ああ、あれですか。

ノーマン・バクシー 夜明けに主人は労働者を一日1デナリオの約束で雇った。9時頃広場に行くとき、まだぶらぶらしている者がいるので、早いとこ葡萄園に行け、相応の賃金を払ってやると送り出した。主人は12時と3時頃にも出て行って同じようにした。5時頃広場に行くときまだ立っている者がいる。主人は「おいおい、早く葡萄園に行けよ」と。さて、夕方になって支払いが始まっ

た。5時頃に来て、1時間しか働かなかった者が1デナリオをもらった。一日中働いていた者は自分たちが幾らもらえるのか期待しただろう。しかし、彼らも1デナリオだった。彼らは不平をいった。こんな不公平なことがあるだろうか。あたりまえだ、ここは、資本主義者も社会主義者も、彼らの不平に同調するだろう。しかしながら、主人の考えは違った。一日働いた者も、1時間しか働かなかった者も1デナリオだ。この考えは、日常世界で通用している原則からは逸脱しているようにみえるだろう。しかし、イエスは天国の話をしている。つまり、その説法によって、この世の秩序である、優れた者が多くの報いを受け、劣った者が僅かな報いを受けるといふ価値観を否定しているんだなあ。能力主義である価値に依拠してという観念を否定しちゃったのよ。能力のある者もナイ者も、比較を許さない、それぞれが、かけがえのない唯一の者、絶対者である。これが天の国だといったんだ。

ライト・ユーン 聖書を最初に読むと理解に苦しむところですね。

ノーマン・バクシー ああ、私も何のことかわからなかった。しかし、役に立つ、役に立たない、そういう価値基準をイエスは突き崩したんだなあ。

ライト・ユーン アメリカのロールズという学者も似たようなことをいつてらるらしいですね。つまり、個人の能力なんて、望んで手に入れたものではなく、偶然に与えられたものであって、つまり、たまたまの賜物だから、知的な私的財産なんでもですらも、ほんとはナイ、すべては共有の社会的財産であると。

ノーマン・バクシー 然り、ライトくん、私の聖職者と飲んだくれの説法を理解してもらえたかな。

ライト・ユーン まあね。

ノーマン・バクシー (どこかしらを指さして) あそこの石ツッコロ。

ライト・ユーン (観た)

ノーマン・バクシー 何で、あんなものが存在しているんだ。

ライト・ユーン ……その問いは、禅ですね。

ノーマン・バクシー ゼン。

ライト・ユーン 禅問答ですよ、それは。

ノーマン・バクシー そこまで飛躍することはナイ。あの石ツッコロは、役にたつかい。

ライト・ユーン 何かにぶつけるとか。

ノーマン・バクシー それが、石ツッコロの役目かい。

ライト・ユーン でもナイでしょうが。

ノーマン・バクシー あの石ツッコロは、あそこにああやって在るだけでいいんじゃないのかい。

ライト・ユーン そうすると、どうなります。

ノーマン・バクシー 石、石を眺める。じつと観る。凝視する。ナニが伝わってくる。そうだな、孤独だな。ものみな孤独であるということがわかる。ありや、これは役にたってしまったな、石ツッコロが。

ライト・ユーン だから禅問答だといったんですよ。(ニヤリと笑う)面白い。今度は話が私のカテゴリーに入ってきましたよ。

ノーマン・バクシー と、いうと、仏教かい。

ライト・ユードン　そうです。存在についてです。

ノーマン・バクシー　しかし、存在なら、仏教の特権じゃないだろう。ギリシャ思想だって、より多くそれについては扱ったんじゃないのかね。

ライト・ユードン　扱いは、仏教のほうが、俄然痛快にして深遠なんです。

ノーマン・バクシー　ふむ。なるほど。で、君は、それに傾倒してると。

ライト・ユードン　いや、面白がってるだけです。

ノーマン・バクシー　石ツコロについて、仏教は何と云ってるんだ。

ライト・ユードン　石ツコロはもうナシにしましょう。ノーマンさんのいわんとするところはわかりましたから。

ノーマン・バクシー　ああ、そうしよう。で、仏教は、飲んだくれは認めないかね。

ライト・ユードン　その話に行く前に、ノーマンさんの理屈の通り、イエスのいうように神は飲んだくれである、役立たずであるとしましょう。

ノーマン・バクシー　はいはい。

ライト・ユードン　従って当然、役立たず、価値なき者、弱者の側にある。

ノーマン・バクシー　弱者の側にあるんじゃないなくて、弱者そのものなんだなあ。君、イエスがゴルゴダで磔刑にあつたさい、何と云った。エリエレマサバクタニ。神よ、私をみはなしたのか、だぜ。神であるイエスが神を疑つたんだ。神を疑るといふのは弱者の中でも徹底的な弱者だ。如何に人間というものが弱き存在であるかを神自身が身を持って理解したんだ。それを神自身が衆目の面前でだよ、いいかい、ここが大切なんだ。自分が如何に役立たずで弱い者であるかを知らしめた。そんな宗教はキリスト教以外、ナイ。

ライト・ユードン　さあ、そこですよ。キリスト教は弱者のものである。この思想に、かの哲学者ニーチェは嘔みつくんです。ニーチェはキリスト教など弱者のルサンチマンだといってますからね。

ノーマン・バクシー　ニーチェか。『アンチ・クリスト』だな。それならまあ、若い頃に読んだことがある。一応、勉強のつもりでね。ルサンチマンというのは、たしか怨嗟のことだな。恨みつらみだな。つまり、キリスト教というのは、ニーチェくんにいわせると、弱者の恨み言泣き言である、こうなんだよねえ。

ライト・ユードン　そうです。まあ、こうです。道に倒れている者に、どうしました、大丈夫ですかと問いかけるのは、人間の倫理的常識であつて、キリスト教の信仰、しいては宗教とは何の関係もナイと彼はいつてます。人間としての当然の行為だということなんです。それを信仰の倫理にすり替えられてはタマランというワケです。もつとも、昨今じゃあ、そういう常識もなくなりつつあります。

ノーマン・バクシー　それは、人々が自分のことを弱者であると認めないようになっていくこととだな。つまりは、プライドの問題だ。みなさん、あまりにプライドが高いんだなあ。プライドが高いと、自分以外の人間にはプライドがナイような気になってくる。不思議なもんだぜ。プライドが高ければ高いほど、他人のプライドを無視してしまう。しかもまったく無意識的にだ。

ライト・ユードン　そうですね。弱者は倒れてるですね。しかし、キリスト教は、その態度に罪という概念を対峙させてきた。弱者を助けられないのは罪であると、そういうんですね。それにニーチェは

烈火のごとく怒ったんですよ。まさに、それは脅しだとね。ノーマン・バクシー牧師は、『ヨブ記』や『ヨハネの黙示録』は嫌いでしょう。

ノーマン・バクシー ああ、嫌いだね。大嫌いだ。『ヨブ記』は神がひとに対して威張るだけの内容しかない。ワシは偉いぞと、いつてるだけだ。何が人間の信仰心を試してるものか。それじゃあ、悪魔の誘惑に神が乗ってることになるぜ。変わりましたと、『ヨハネ黙示録』は神がひとに対して恫喝する、ある妄想狂の描いた終末論だ。どうだ、こんな恐ろしい終末が来るぞ、それでも、お前はキリスト教に帰依しないのか。助かりたければキリスト教にすがるしかないぞよ、と。こりゃあ、100%マンガだな。旧約のヨブ記と、新約の黙示録は、キリスト教の最低なところだ。あれを読む限り、君のいうようにキリスト教のルサンチマンを認めてもいい。

ライト・ユーノ ええ、私も、仏教の数限りなく存在する教典のひとつで、おそらく最も有名な教典である法華経には、似たような思いを抱いてます。

ノーマン・バクシー ふーん、法華経については、私は知らんがそうなのか。

ライト・ユーノ 法華経というのは、私にいわせると、過激な教典ですが、排他的なんです。おそらくは、虐げられてきたある部族から始まった仏教解釈、仏典であろうという、そういう観方をしている研究者もいますね。

ノーマン・バクシー しかし、法華経というのは、かなりの影響を与えてきたというふうに聞き及んでいるが、そうじゃないのか。

ライト・ユーノ 革命家である北一輝、文学者である宮沢賢治、みな影響されています。しかも熱烈に。なにしろ、世直しの大乗仏教ですからね。法華経はいいいます。法華経がイチバンであると。

この教典以外の教典は外道だと。法華経に書いてあることの大半は、法華経はエライ、とそういうことなんです。メタな教典です。この教典はスゴイということがその教典に書かれてあるんですから。

ノーマン・バクシー 君は、その法華経というのには批判的なんだね。

ライト・ユーノ 論理的にというよりも、心情的になんですけどね。

ノーマン・バクシー それは、キリスト教にもある。おそらく最期の審判という考え方と似ていると思える。神がひとを裁く。けつきよくは、神というのは権威じゃないかということだ。法華経も権威でありたいんだろう。それを信じないと地獄に落ちるというワケだな。

ライト・ユーノ そうです。

この時、不意にキャロル・ハリソンが二人の論議に口を挟んだ。

キャロル・ハリソン 天国という楽園に火をつけて焼き払い、地獄という責め苦の業火に水をかけて、これを消し去り、さて、残ったものは、何なんでしょう。

ノーマン・バクシーも、ライト・ユーノも、いまそこにキャロル・ハリソンがい ることに気づいたかのように彼女をみた。

キャロル・ハリスン あら、ごめんなさい。拝聴していました、お二人のお話。私、キャロル・ハリスンです。本日ここに赴任してきた看護婦です。

ノーマン・バクシー ああ、そう。私はノーマン・バクシー、牧師です。

ライト・ユーノ ライト・ユーノといえます。ジャーナリストとでもいいましようか。

ノーマン・バクシー で、天国を焼き払って、地獄の火を消して、何が残るんです。

キャロル・ハリスン あら、牧師さんのコトバとは思えない質問ですね。

ノーマン・バクシー いや、牧師というより、ただの飲んだくれですから。

キャロル・ハリスン 残るのは、神の愛だけですわ。

ライト・ユーノ 神の愛ですか。

キャロル・ハリスン そうです。永遠の生命に憧れたり、地獄の責めに恐怖したり、それを信仰の動

機、信仰の理由にしてはならないということです。ただ、神の愛だけを頼りに神を求めればよいとは私は思うのです。永遠の生命も天国もナイ。悪行を罰する業苦の地獄もナイ。そうすると残るのは愛だけです。ひとは愛のことだけを考えればいいのです。

ライト・ユーノ 神の愛とは何ですか。簡単なようで、難しい概念ですが。

キャロル・ハリスン 難しくはありません。実に単純で明瞭です。何故、神が人類を創造したのか、

それは愛しあいたいという、それだけの理由からです。

ライト・ユーノ 愛しあいたい。それは、互いにですか。

キャロル・ハリスン もちろん。神とひとがお互いに愛しあうのです。

ライト・ユーノ なるほど、愛の対象として、ひとは創られたというんですね。

キャロル・ハリスン そうです。ですから、人間は神が創ったロボットではありません。神の思い通りに動くものでもナイのです。ある者は神に反逆もするのです。それでいいのです。神と人間との関係は、支配と被支配ではなく、ただ、愛しあう対等の関係なんです。背く者がいてもいいのです。愛はそんなに都合よく簡単に成立するものではナイことはみな、知っています。神とひとの愛もその如くです。

ノーマン・バクシー なるほど、そうですね。

キャロル・ハリスン 愛するとは何か、そんなことは、どんな人間も誰から教えられなくても知っています。残虐非道な悪人ですら、ひとを愛します。

ノーマン・バクシー ふむ、それゆえに、イエスいたもう、ただ赦せと。

ライト・ユーノ 浄土真宗の祖、親鸞もいいました。悪人往生を遂げると。親鸞の悪人正機説です。

く善人なおもて往生をとぐ、いわんや悪人をやく善人ですら救われるのであるから、いわんや悪人が救われるのは簡単なことだということです。正機（しょうき）というのは正しい機根（きこん）の略で、機根とは、如来の力によって救われる可能性、あるいは資格のことです。つまり、悪人というのは、如来に救われる資格のある存在だといいい切っているんですね。元々は法然のコトバだそうですが。

ノーマン・バクシー イエスの教えに近いんだな。

ライト・ユーノ このあたりはね。しかし、親鸞は弱者とはいってませんよ。悪人です。これは、ニーチェもお気に入りだったようです。ニーチェは『アンチ・クリスト』で、キリスト教は罪など

という概念を持ち出したが、仏教はそんな強迫観念のようなものは持ち出さなかった。そこが優れているとってますね。仏教は、端的にいう、この世は苦しいと、生きることは苦しみである
と、そこで、智慧という、実際の、実質的なことを述べてそれに対処しようとしているとね。

ノーマン・バクシー ニーチェは、仏教を認めているんだな。

ライト・ユーン いや、その虚無思想にいたっては手を焼いてるようですが。

ノーマン・バクシー 虚無ねえ。そうだろう。キリスト教が恐れるものを仏教は抛り所にしたんだからな。

ライト・ユーン 虚無というのは恐ろしいものではない、というのが釈迦の一大発見だったような気がしますね。

ノーマン・バクシー キリスト教には受け入れがたい論理だな。

ライト・ユーン いや、つまり釈迦の考えた虚無、つまり「無」というのはナニかということなんですよ、問題は。これが東洋思想の根本、根源にもなってくるんですから。西洋哲学とはまったく逆のベクトルを見出したんですから。

ノーマン・バクシー で、つまり、無とはなにかね。

ライト・ユーン 釈迦は入滅、つまり死ぬ直前に最も親しい弟子に対してだけは、真理のコトバを残したという説があるんです。そのコトバとはこの世界は虚無であるくだというんです。最も、これは作られた話だと、諸説ありまして、普通はく真理を愛せ、自己を愛せくというのが最期のコトバとしてのこっているんですが。

ノーマン・バクシー いや、そんな学問的な事はどうでもいいんだよ。私の聞きたいのはだね、ジャーナリスト、ライト・ユーンくんの考える無だよ。

ライト・ユーン 私の考えはおよそこうです。身体やココロは何故鬱陶しいのか、何故意のままにならないのか、心臓だって勝手に動いている。胃腸もそうだ。だいたいにして、脳のことを脳が知っているかというところ、そうではナイ。けっきょくは自分のことを何も知らないで人間は生きていく。と、そういうところから、釈迦は主体というものを疑ったと思うんです。いったい主体などというものは何なんだ。こんなもの実に危うい存在じゃないかと、そう考えたと思うんです。じやあ、釈迦が抛り所にしたのはナニか。

ノーマン・バクシー 何だね。

キャロル・ハリスン 何ですか？

ライト・ユーン 釈迦は、世界で最初の無心論的実存主義者であるというのが私の見解です。釈迦は主体を無化しようとしたんです。あやふやなモノと決別しようとしたんです。それはどうやってか、巨いなる客観と同化することによって、真実の主体の覚醒を目指したんです。巨いなる客観、それが無です。無との同化による真実の主体の覚醒、これが釈迦の唱えた実存です。何事もあるようで無い。無いように在る。ならば一切は無いと考えて差し支えない。その無いところに人間は在るのだ。これが、仏教のいう無です。

ノーマン・バクシー ますます、キリスト教とは相いれないね。

ライト・ユーン ついでにいうなら、ニーチェはキリスト教徒をただひとり認めています。それは誰あろう、

ノーマン・バクシー イエス・キリストそのひとだな。で、そのひとは十字架の上で死んだと。だから、神は死んだと。そういうワケだ。

ライト・ユーノ そうですね。ニーチェは、イエスにだけは尊敬の念を持っています。そうして、イエスをゴルゴダで殺した民衆から、一般大衆の出現を予言したのです。

ノーマン・バクシー いやあ、何だか、話がまとまってしまったなあ。こいつは参った。(笑いながら、キャロル・ハリスンに) まあ、一杯、いきませんか。

キャロル・ハリスン ええ、いただきます。

キャロル・ハリスンは、ショット・グラスにつがれたウイスキーをぐいっと呑む。

ノーマン・バクシー (笑う) 愛ある呑みッ振りだ。

キャロル・ハリスン あの、婦長さんはどこにいらっしやるか、ご存じありませんか。

ライト・ユーノ そういや、ここんとこ、姿をみませんね。

ノーマン・バクシー 出張という話も聞かないがね。

また声がキャロル・ハリスンに聞こえる。

声 婦長の指示に従いなさい。そうして、あなたは、あなたの仕事をみつけなさい。あなた自身の手で。

キャロル・ハリスン (声に答えて、口に出している) ええ、そうですね。

ライト・ユーノ えっ？

キャロル・ハリスン いえ、早く仕事をしないと。

ノーマン・バクシー まあ、ここはのんびりしているんです。慌てることはナイ。婦長だってそのう

ち出てきますよ。酒がナイな。どれ(立ち上がる)

ライト・ユーノ あっ、勝負はどうします。

ノーマン・バクシー しばらくはその看護婦さんに相手をしてもらってくれ。私は酒が何処かに隠してないか捜してくる。

ライト・ユーノ 院長室の書庫あたりがクサイですよ。

ノーマン・バクシー ああ、私も、あそこには目をつけている。

ノーマン・バクシーは立ち去った。

ライト・ユーノ ほんとに(チェスを指さして) つづきをやりますか。

キャロル・ハリスン ええ、お話をもっと聞きたいし。

ライト・ユーノ そう。さてと。(盤上をみる)

キャロル・ハリスンに声が囁く。

声 院長はいません。

キャラル・ハリスン（ココロの声） いないとは？

声 患者の女性と駆け落ちしてしまいました。

キャラル・ハリスン（ココロの声） まあ。

声 責めてはいけません。それが映画なら、ラブ・ロマンスですからね。

キャラル・ハリスン（ココロの声） そうですわね。じゃあ、副院長は？

声 彼も行方不明です。何でも、オハラ財団の寄付金をごっそり持ち逃げしたらしいのです。

キャラル・ハリスン まあっ。

ライト・ユーン えっ。

キャラル・ハリスン あ、いえ。

ライト・ユーン（二手打った）

キャラル・ハリスン（ココロの声） じゃあ、誰が治療院を統率しているんですか。

声 婦長でしょう。しかし、患者たちと医師や看護婦たちで自立した運営がなされているというふうにも聞いてます。

ライト・ユーン キャロル・ハリスンさんでしたね。

キャラル・ハリスン えっ、ああ、はい。

ライト・ユーン 先程の、愛についてなんですが。

キャラル・ハリスン はい。

ライト・ユーン 何故、「愛」なんでしょうかね。

キャラル・ハリスン というと。

ライト・ユーン 神と人間の関係が何故、愛なんだろうかと、ふと思ったんです。

キャラル・ハリスン それが最高の快樂だからでしょう、きつと。

ライト・ユーン（キャラル・ハリスンの顔をみつめて）いやに明快なというか、ビビッドな答えですわね。

キャラル・ハリスン そうでしょうか。愛している、愛されている、赦している、赦されている、これらは、とても幸福な状態なんじゃないでしょうか。至高の状態ですよ。それ以上ナニを求めるのです。

ライト・ユーン なるほど。おおよそ、肉欲など及びもつかないレベルなんでしょうね。

キャラル・ハリスン ええ、きつと。

スー・ルーが、特異なコスチュームをまどつて、通り過ぎた。

溶暗。

溶明。

キャロル・ハリスンが立っているその前方に白衣を着た男が座って、キャロル・ハリスンのことをみている。二人、黙したまま、見合っていると、ハンス・トルフとブレンド・デイが走り出てきて、キャロル・ハリスンのところまで来た。

ハンス・トルフ　キャロル・ハリスンさん。

キャロル・ハリスン　（ハッと気づいて）

ハンス・トルフ　婦長さんなだけど。

キャロル・ハリスン　みつかったんですか。

ハンス・トルフ　それが何処にも姿がないんだよ。なっ。

ブレンド・デイ　あちこち捜したんだけど。森にでも行ったのかな。

ハンス・トルフ　それとも、町かな。

ブレンド・デイ　ああ、そうだな、町へでも出かけたのかもしんないな。

キャロル・ハリスン　町へ。

ブレンド・デイ　時々、行くんだよ、あの人。

ハンス・トルフ　どうする。

ブレンド・デイ　町の郵便局に電話してみようか。立ち寄ったか。

ハンス・トルフ　ああ、それがいいや。キャロル・ハリスンさん、そうしてみるよ。

キャロル・ハリスン　ええ、ありがとう。

少年二人去った。

白衣の男が口を開いた。

―― 私は医者です。ヤマモトと申します。ドクター・ヤマモトです。

キャロル・ハリスン　医者。ここの治療院のですか。

ヤマモト　そうです。

キャロル・ハリスン　おかしいですね。

ヤマモト　何がですか。

キャロル・ハリスン　このオハラ治療院では、医師も看護婦も白衣を身につけないと聞いてきました
が。

ヤマモト　あなたは？

キャロル・ハリスン　キャロル・ハリスン、新任の看護婦です。

ヤマモト　ほう、新任の看護婦さんですか。

キャロル・ハリスン　はい。今日、赴任してきました。

ヤマモト キャロル・ハリスン、たしかに、あなたがお聞きになったように、このセント・オハラ精神治療院では、医師は白衣を着ません。

キャロル・ハリスン では、何故。

ヤマモト 私が医師ではなく、患者だと、あなた、思ってますね。だって、白衣を着てるんだから。いや、妙なもんですね。精神治療院という、病院、もつともここは療養所といったほうがいいんですが、そこでは、医師にみえるものが実は患者だったりして、その判定をくだしている者が、患者だったりする。

キャロル・ハリスン あの、私は。

ヤマモト あなたのことをいったものではありません。もし、私が患者であれば、そう、この白衣を着ているという理由でもってですよ。そうすると、その判定をくだしているのは普段着を着ている者であり、それは患者である可能性がある、そういつているのです。わかりますね。

キャロル・ハリスン …… そうですか。

ヤマモト 私が何故、白衣を身につけているか、その理由はアトでお話するとして、私が医者である証拠というのをあなたは知りたくありませんか。知りたいでしょ。知りたいはずですわねえ。

キャロル・ハリスン ええ。

ヤマモト では、少しお喋りでもしましょう。おかけになりませんか。

キャロル・ハリスン いえ。

ヤマモト じゃ、好きなように。

キャロル・ハリスン (肩掛け鞆から、煙草のようなものを出した)

ヤマモト ここは禁煙です。

キャロル・ハリスン ああ、申し訳ありません。(片づけた)

ヤマモト この庭が禁煙なのです。これは、おばさん、そう、おばさんです。おばさんここで呼ばれている賄いの方のお達しでね。庭に吸殻が落ちているのをたいそうに嫌うんですなそのおばさんは。じゃあ、灰皿を、いえ、灰皿に吸殻があるのもダメだそうです。ですからみんなは、自室で吸います。おばさんはなかなか発言力のある方ですね、というの、この食事は彼女の手によって、我々の口に入ります。ご存じですか、食を制する者は一家を制す。そういう警句、コトバがあるんです。おわかりでしょ。おばさんが我々の食事一切を、その味、その量、その色、その香り、ええそうです、献立を決めるのです。ですから、私たちは、おばさんのいうことならたいはい従います。無茶でないならね。実際、無茶なことをいうひとではありません。すべてにスジは通っているんです。さて、

何処からか、先程から微かに音楽が(ジャズらしい)聞こえているのだ。

キャロル・ハリスンが、それを耳に感じたのを、ヤマモトが察した。

ヤマモト どうかしましたか。

キャロル・ハリスン 音楽が。

ヤマモト ええ、ジャズですね。ここからもう少し山を上がると、一軒の別荘が建っているんです。

オハラ財団の物らしいです。いま、誰かそこに保養に来ているんでしょう。この辺りは、これでもリゾート地ですからね。そこから、聞こえるんです。実にミス・マッチなジャズです。ミス・マッチというのは、つまりジャズなんてものは、この治療院には相応しくナイということですね。どうです、それほどミス・マッチでもありませんか。そうお考えですか。

キャロル・ハリスン いえ、わかりません。

ヤマモト 私は音楽には通じてナイもんでね。ただ、雰囲気といいますが、情緒の問題をいつているのです。ここに昔、慰問の楽団が来たことがありました。それが、この国の軍楽隊だったんです。どうです、ものすごいミス・マッチでしょ。そこで、どうです、おわかりですか、この白衣の理由。

キャロル・ハリスン ミス・マッチ・・・

ヤマモト 利発な方ですね。私は、私にミス・マッチなものを身につけているんです。私は医者ですが、ここでは、医者は白衣を着ない。しかし、敢えて私はミス・マッチを選択したというワケです。

キャロル・ハリスン そのワケは？

ヤマモト それはご想像下さい。

キャロル・ハリスン 想像しにくいですね。

ヤマモト 私が医者であることを証明するに、如何にすれば、いいか。思案してみましよう。医薬品や医術の話をしてもらえないと思えますが如何です。

キャロル・ハリスン そう、思います。

ヤマモト では、「死」について語りましょう。

キャロル・ハリスン 死についてですか。

ヤマモト 医者は、生について語りません。それは哲学者の役目です。もつぱら、医者に語る資格があるのは、死というものについてです。それは医者の特権でしょう。

キャロル・ハリスン アタリマエのような珍しいようなお考えですね。

ヤマモト ミス・マッチですよ。コトバのね。

キャロル・ハリスン 死について、自称医師のあなたから、ナニを語っていただけられるんでしょうか。えーと、

ヤマモト ヤマモトです。

キャロル・ハリスン ヤマモトさん。

ヤマモト 死ぬということは恐いですか。恐ろしいですか。

キャロル・ハリスン 私が？それとも一般論を？

ヤマモト 貴女でよろしい。

キャロル・ハリスン 私については答えたくないのです、一般的な答えをいいます。たぶんそれは恐ろしいことだと思います。

ヤマモト では、殺すのは。

キャロル・ハリスン 状況によります。

ヤマモト 殺されるのは。

キヤロル・ハリスン それは、

ヤマモト これは一般論で答えなくて下さい。貴女が殺されるのです。

キヤロル・ハリスン 恐いですね。

ヤマモト ええ、そうなんですよ。死というものは、死そのものは恐くとも何ともナイものなんです。だって、放っておいてもひとは死ぬんですから。

キヤロル・ハリスン それは、理屈になっていないように思いますが。

ヤマモト 直截に申しましょう。私がいいたいのはこうです。ひとは死に恐怖しているのではナイという事です。恐怖しているのは死に方です。ひとは死に方というものに恐怖しているだけで、死そのものについての恐怖などというのは本来ナイのです。ですから、医者は患者から、死の恐怖ではなく、死に方の恐怖を取り除いてやればいいのです。やすらかに死ぬ。どうです、この甘美な響き。凄惨に死ぬ、恐ろしいことです。眠るように死ぬ。安楽ですね。残酷に死ぬ、恐怖です。この恐怖、死に方の恐怖を取り除く、それが医療というものです。

キヤロル・ハリスン オモシロイご意見ですね。

ヤマモト たとえば、ひとが死ぬとしましょう。私も、あなたも。しかし、その向こう側が存在するとしたら、ひとは恐怖しますか。

キヤロル・ハリスン 天国へでも行けるといいますか。

ヤマモト そうとは限りません。いや、まったくそうではナイのかも知れません。死というものが含まれるのは生きている範疇です。生が終われば死もまた終わるんです。生きているから死に恐怖するだけで、死んでしまつて死に恐怖する者はいません。ところで、死が始まると仮定するので、生の時間があつたように、死の時間が存在するのです。それは生からみれば、死の向こう側の始まりです。そこへ患者を送り届ける。これが医者 of 勤めです。少なくとも、私が施している医療はそうなんです。

キヤロル・ハリスン 三途の川の渡し人ですか。

ヤマモト 鋭い揶揄ですな。しかし、どうです。これで、私が医師であることがわかっていただけましたか。それとも、すこぶるやっかいな狂人であると認識されましたか。

キヤロル・ハリスン 難しいところですね。

ヤマモト 話を変えましょう。私から患者をみることにについて、その視点をお話ししましょうか。この患者はさまざまな症例を示しております。しかし、根本的には、単純なもんなんです。すべての患者においての問題、それはコトバのエントロピーというヤツです。あらゆる患者にみられることですが、次第にコトバが無秩序になっていくのです。コトバのエントロピーの増大です。それが、この患者のすべてに見受けられる症状です。

キヤロル・ハリスン さつきよりは、医師らしいご意見だと思えます。

ヤマモト そう結論を早めなくてもよろしい。私は図書館の本ではなく、いわば私家版の書物です。

ゆつくり読んでくださればいい。さてと、ひとつ問題を出しましょう。

キヤロル・ハリスン 問題。

ヤマモト 論理は必ず反証されるという論理は反証されるだろうか。どうです。

キヤロル・ハリスン そのようなパラドクスを弄ぶために私はコトバを覚えたわけではありません。

ヤマモト 問題を変えます。あなたにとって、「存在」とは何です。

キャロル・ハリスン 「存在」また、その話ですか。この方はよほどそういう哲学がお好きなんです。

ヤマモト 日々退屈していると、ひとは哲学してしまいます。

キャロル・ハリスン ・・・視線のことですね。私は視線を感じます。この方向にあの方向に、ありとあらゆる方向に、私を観る視線を感じます。その幾多の眼にさらされて私はここに在る。それが存在です。

ヤマモト 他人、他者の視線ですね。

キャロル・ハリスン いいえ、私自身の視線かも知れません。

ヤマモト 先程、あなたは酔どれの牧師と、似非インテリを相手に神について語ってらっしゃいましたね。

キャロル・ハリスン お聞きになっていたのですか。

ヤマモト なんとはなくね。そこで、私が考える神についてお話ししましょうか。

キャロル・ハリスン ええ、是非、お聞きしたいです。

ヤマモト 私は宗教者ではないので、宗教の教義かひとか、二者択一で何れかをとるならば、ひとをとります。宗教はアテにはならないが、ひと、つまり他人はまだアテになる。他人というのはきつくところは神なんです。究極の他者、絶対的他人、それが神です。よって、宗教というのは本質的に他力本願なんです。さっきあなたが視線とおっしゃった、そのうちの他人、他者、それが神です。

キャロル・ハリスン 他人。

ヤマモト そうです。神というのは、私にいわせれば、絶対的他人です。相対的に自分がいるから他人であるということではなく、絶対的に神というものは他人なんです。あなたの神の愛と矛盾しますか？しないでしょう。もし、あなたの論理である神とひととの関係が愛であるならば、互いにその存在は他人でなくてはならないでしょ。どうです。

キャロル・ハリスン ・・・ええ、そう、なりますね。

ヤマモト 人間が神をおのれの中に感じる時、そういう時があるとすれば、それは自分の中に他人を類推して認識しているだけなのです。ヘブライの神がのたもうた、汝の隣人を愛せ、というのは、つまり、他人を愛せということです。神はついに究極に他人です。けして自分自身ではナイのです。さすればどうです、この世の中にあなた以外、何と多くの神がいることでしょうか、しかし、それは神のようで神ではナイ。ただ、神もまた他人であるという、それだけは記憶しておいてもらいたいんですがね。もつとも、ワイトゲンシュタイン学派はこんなことは認めないでしょう。彼らにとつては神か他人であるということは困るんです。私と他人とでは、もはや彼らには世界が異なるんですから。キャロル・ハリスン ああ、そんな話も聞きましたわ。

ヤマモト ええ、ここではよくある問答です。しかし、私の仕事からしても神は他人ということにしてあるんです。

キャロル・ハリスン 医療の面ですか。

ヤマモト そうです。患者は他人ですからね。要素としては神に近いはずなんです。医者が患者に対

峙する。この時、医者とは神と向かい合っていると思わねばならないのです。

キャロル・ハリスン 興味あるご意見だと思います。

ヤマモト そうでしょ、私が医者であることが次第にわかってきたでしょ。

キャロル・ハリスン でも、

ヤマモト (立ち上がって、あらゆる方向をみた) 私も酒を呑みます。夜の静寂(しじま)の中でただ、じつとグラスを傾ける。テレビやラジオ、ステレオのスイッチを入れるということもない。本も新聞も雑誌も読まない。つまり、ぼんやりするんですな。そうすると脳に流れ込んでくるものがある。精神、意識、それらは波うたぬ水面のようになって、その空間をナニモノカが流れ込む。私は世界を感じている。私は私を感じている。世界や私から解き放たれたナニモノカを感じている。これは何だろう。謎です。しかし、至福の時間であることだけはワカル。その時、気配がする。遠く遙か遠くに、・・・他人の存在の気配が、する、のです。それを神と呼んでもいいような気がしてくるのです。

ヤマモトは立ち去った。

キャロル・ハリスンは不思議な心地で、かたわらの立方体に腰を下ろした。

スー・ルー氏が通り過ぎていく。

昼食前。

キャロル・ハリスンの姿はナイ。

ベーカー・レインがパティオの片隅、如雨露で、何かに水をやっている。

クエスト・エルがしゃがみ込んで、ベーカー・レインの仕種をポカンと観ている。

別の場所でおじさんが地面をみつめている。

おばさんは空模様をみている。

ハンス・トルフとブレンド・デイは、面子（メンコ）に興じている。

おばさん 降るかなあ、晴れるかなあ。

ベーカー・レイン （おばさんのほうはみないで）降りますよ。

おばさん そうね、あんたが、如雨露で水をまくと、必ず雨になるからね。

ベーカー・レイン そうですよ。

おばさん 必ず雨になるなら、如雨露で水をまくなでことしなくていいのに。

ベーカー・レイン 私が水をまくから雨になるんですよ。

おばさん 雨を呼ぶ女、ベーカー・レインね。

ブレンド・デイ おばさん、雨になるの。

おばさん みたいだね。

ハンス・トルフ もうすぐ、お昼ご飯でしょ。

おばさん そう、みたいだわさ。

ブレンド・デイ みたいじゃ困るよ。腹減ってんだから。

ハンス・トルフ 今日の献立は？

おばさん 大根と豆を煮たようなものかな。

ブレンド・デイ ようなものって。

おばさん そんなようなものが出来上がったからさ。

おじさん 俺は、好きだよ、大根と豆。

おばさん あんた、さっきから、ナニを観てるんだい。

おじさん 蟻だよ。蟻がいるんだよ。

おばさん 蟻。

おじさん ありありとありありつづくありのむれありありありありの大将。

おばさん 何だいそりゃ。どら、何処に蟻がいるって。

おじさん （地面を指さす）

おばさん （その地面を踏みつぶす）こんちくしょう、こんちくしょう。

おじさん あっ、あっ、ナニすんだよ。

おばさん （黙って踏みつぶす）

おじさん 死んじゃった。蟻、死んじゃった。

おばさん ああ、せいせいした。

ハンス・トルフ おばさん、婦長さんは何処へ行ったのかな。

おばさん さあね。

ハンス・トルフ あのさ、僕、見覚えがあるんだ。

おばさん 見覚え。婦長かい。

ハンス・トルフ いいや。

おばさん 何をいつてるんだい、ハンス。

ハンス・トルフ キャロル・ハリスンさんのことさ。

おばさん ああ、新任の看護婦さんか。

おじさん そのキャロル・ハリスンは何処にいるんだい。

ハンス・トルフ 婦長さんを探してるんだろ。

ブレンド・デイ 町にもいなかったんだ。電話で聞いたんだけど、郵便局も市場のひともみてないってさ。

おばさん ハンスは、キャロル・ハリスンというひとに、見覚えがあるのかい。

ハンス・トルフ ああ、何か、記憶のこの辺に。

おばさん きつとよく似たひとをみたことがあるんだろ。

ハンス・トルフ そうだろうか。

おばさん だって、今日、初めて来たんだろ、そのキャロル・ハリスンってひとは。

ハンス・トルフ うん、そうなんだけど……

おじさん 何処かに石はないかな。

おばさん 石？

ブレンド・デイ どうすんの。

おじさん 蟻さんのお墓を作ってやろうと思ってね。

おばさん およしよ、バカみたいなこと。

おじさん だけど、おまえ、踏みつぶすのはいくら何でも、蟻にやあ罪はナイよ。

おばさん 蟻には罪はなくても、私には虫の居所ってのがあるの。

ハンス・トルフ 不機嫌だったの。

おばさん 蟻みてたら、何だか無性に腹が立ったの。

おじさん じゃあ、お祈りだけでもしてやろう。

ブレンド・デイ 僕たちもやろうか。

おばさん 何でも、やっておくれ。(また空をみて) どうしようかな、洗濯。

ブレンド・デイ それより、昼御飯だろ。

おばさん ああ、そうだね。早くお祈りとやらを済ましてしまいな。

おじさん (両手を握りあわせると) 遠い地平線が消えて、ふかぶかとした夜の闇に心を休める時、

はるか雲海の上を音もなく流れる気流は、たゆみない宇宙の営みを告げています。満天の星をい
ただくはてしない光の海をゆたかに流れゆく風に心を開けば、きらめく星座の物語も聞こえてく

る夜の静寂（しじま）の何と饒舌なことでしょうか。光と影の境に消えていったはるかな地平線も臉に浮かんでまいます。アーメン。

ブレンド・デイ　どっかで聞いたことがある文句だね。

おばさん　きつと成仏するだろうさ。さて、昼飯の準備と。（去った）

ブレンド・デイ　飯食ったら、森のほう、捜しに行こうか。

ハンス・トルフ　ああ、そうしよう。でも、

ブレンド・デイ　何だよ。

ハンス・トルフ　やっぱり、僕、あのひと、みたことあるんだ。

――おばさんの声が聞こえる。「あんた！」

おじさん　はいはい。（去った）

ブレンド・デイ　ひよつとして、クエストさんと同じ女優さんだったか何だかでき、映画か何かで観

たんじやないか。

クエスト・エル　私や知らないよ。

ブレンド・デイ　ともかく、飯だよ。

ブレンド・デイとハンス・トルフも去った。

クエスト・エル　（ベーカー・レインに）どんな花が咲くの。

ベーカー・レイン　さあ、どんな花でしょうか。

クエスト・エル　種、蒔いたんでしょ。

ベーカー・レイン　ええ。

クエスト・エル　何の種。

ベーカー・レイン　黒いのや、黄色いのや、茶色いのや、赤いのや。いろいろ。

クエスト・エル　それ、何の種。

ベーカー・レイン　さあ、ワカラナイんです。

クエスト・エル　初夏に蒔く種類なの。

ベーカー・レイン　さあ、どうなんでしょう。

クエスト・エル　花の種なんか、何処から持ってきたの。

ベーカー・レイン　薬局からです。

クエスト・エル　薬局。

ベーカー・レイン　はい。

クエスト・エル　あんた、それ、花の種じゃないよ。

ベーカー・レイン　じゃあ、何ですか。

クエスト・エル　クスリだろ、きつと。

ベーカー・レイン　でも、私、この治療院の園芸担当ですから。

クエスト・エル 園芸担当だからといって、錠剤蒔いて、芽が出るワケがないよ。

ベーカー・レイン でも、こうやってお水をやって、

クエスト・エル いままでに、花、咲いた？

ベーカー・レイン ええ。花壇があるんです。

クエスト・エル それ、何処に。

ベーカー・レイン 内緒です。秘密の花園ですから。

クエスト・エル 秘密の花園ねえ。ほんとに花が咲いてるの。

ベーカー・レイン 咲いています。

クエスト・エル ここにも咲くのかね。

ベーカー・レイン ここに咲かなくてもいいんです。何処か別の場所でもいいんです。騙されたワケじ

やないから、ここで、私が水をやると、何処か他のところに、花は咲いてくれます。それでいい

んです。私は多くのものに騙されてきました。花はでも、私を騙したりしません。親兄弟、親戚、

友達、学問とか、教養とか、宗教とか、資本主義とか、社会主義とか、政治とか、社会運動とか、

本やテレビやラジオや、ひとや人間や、男や、ひとや人間や男や、ひとやひとのコトバや、ひと

や、ひとや、ひとや、私は騙されてきました。全部嘘でした。

クエスト・エル 凄まじく騙されたのね。

ベーカー・レイン 私は何故生まれてきたんだろう。そんなこと考えました。

クエスト・エル で、何で生まれてきたの。

ベーカー・レイン きつと、抽選に当たったんだろうと思います。

クエスト・エル 抽選。

ベーカー・レイン はい、貧乏籤というのを引いたんです。

クエスト・エル 不幸だったんだ。

ベーカー・レイン 私は、こうして水をまくと咲いてくれる花と、肌に触れるモノの感触だけを信じて

います。それだけは嘘ではナイような気がするんです。

クエスト・エル 肌に触れるモノって。

ベーカー・レイン こないだ、水をやったら、毛虫に刺されたんです。そこが、赤く腫れて痛かった

んです。でも、その皮膚の痛みは信じられるような気がしたんです。それだけが、世の中でほん

とうのことに思えたんです。

クエスト・エル あんた、ここに来て、何年になる。

ベーカー・レイン (しばし、考えているようだが)・・・忘れしました。

クエスト・エル だろうな。

キヤロル・ハリスンが、現われた。

ベーカー・レインは無心に水をやっている。

クエスト・エルが気づいて。

クエスト・エル あら、あんた、もうすぐお昼だよ。何処にいったの。えっと、この女性はベ-

カ・レインさん。この治療院の園芸担当のひと。

ベーカー・レイン (初めてキャロル・ハリスンをみて) ベーカー・レインです。よろしく。キャロル・ハリスン キャロル・ハリスンです。そこに花の種でも植えたんですか。

ベーカー・レイン ええ、これから夏と秋を越えて、冬に咲きます。

キャロル・ハリスン 冬に咲く花ですか。

ベーカー・レイン そうです。吹雪の中に凜として咲くのです。

キャロル・ハリスン 吹雪の中に凜として咲く花。そういう花もあるんですね。

ベーカー・レイン はい。私もそういうふうになりたいです。

クエスト・エル うまく咲くといいね。

ベーカー・レイン はい。

おばさんが現われて。

おばさん ランチだよ。昼飯。食堂に集合だ。(キャロル・ハリスンをみとめて) えーとあんたが、キャロル・ハリスン キャロル・ハリスンです。今日、赴任してきた新任の看護婦です。おばさん

ああそう。じゃあ、あんたも、昼飯をお食べ。

キャロル・ハリスン 私の分もあるんですか。

おばさん あるよ。

キャロル・ハリスン いったい、何人のひとが食事をとるんですか。

おばさん 食事は、10人でも20人でも、一回一食。

キャロル・ハリスン えっ？

おばさん 私はね、何人分なんてご飯の作り方をしたことはないの。ともかく、どんと一食作る。それをその時の人数で分けて食べる。それだけのこと。満腹の日もあれば、腹ぺこの日もある。でも、それでいいの。毎日満腹なんてのは、罰がアタル。要するに分け合って食べる。それが大切なの。

キャロル・ハリスン 素晴らしい考え方ですね。

おばさん 私の勝手な我が儘。

キャロル・ハリスン あの、

おばさん 婦長さんかい。

キャロル・ハリスン はい。

おばさん みかけないね。・・・さあ、早いところ食べとくれよ。

おばさんは踵を返した。

と、雨の気配。

おばさん アラ、やっぱり雨になっちゃった。

雨の音。

溶暗。

7の目

溶明。

スー・ルーが通り過ぎて行く。

雨が降っている。

ベーカー・レインはまだ如雨露で水をまいている。

すでに如雨露の水は空っぽだ。

キャロル・ハリスンは、食堂には行かなかったようだ。

キャロル・ハリスンだけ傘をさしている。

キャロル・ハリスン (ベーカー・レインに) お昼、いただかないんですか。

ベーカー・レイン 私は一日一食主義なんです。朝、ホットケーキと蜂蜜をいただきましたから、今日はそれでいいんです。

キャロル・ハリスン 経済的ですね。

ベーカー・レイン 私が生まれてきた責任は、いったい誰がとってくれるのでしょうか。

キャロル・ハリスン (突然だったので) えっ。

ベーカー・レイン どうされました。

キャロル・ハリスン いえ、あなたのコトバがあんまり、突拍子だったものだから、ちょっと驚いたの。

ベーカー・レイン そうですか。

キャロル・ハリスン いつも、そうなの？

ベーカー・レイン (考えているようだが)・・・さあ、どうでしょう。

キャロル・ハリスン 雨に濡れますよ。

ベーカー・レイン (キャロル・ハリスンのコトバを無視するかのよう)死ぬと、天国に行って、帳尻があうんですか。

キャロル・ハリスン (今度は、彼女が少々考えた)んー、えーと・・・神の国というのは天国ではナイと思います。やがて地上に出現するであろう、ユートピアです。ひとはそれを創設する希望の下に生きねばなりません。どれだけ遠い未来であるのか、ワカラナイけれど、私がいまここにいるのは、そうして貴女がいまそこにいるのは、その未来の旅の行程に他ならないのです。私は幼い頃からそんな教育を受けてきました。

ベーカー・レイン 騙されたんですね。可哀相に。

キャロル・ハリスン いえ、満更、嘘だとは思ってないのです。

ベーカー・レイン それは戦争のナイ平和な世界のことですか。

キャロル・ハリスン もちろん、そうです。

ベーカー・レイン そんな世界は来ないんです。

キャロル・ハリスン 何故です。何故素晴らしいきれるんです。

ベーカー・レイン ひとが何故戦争をするのか知ってますか。

キャロル・ハリスン いえ。あなたは知ってるのですか。

ベーカー・レイン それはね、ひとを殺すのが気持ちいいからなんです。それは一番やってはイケナイことなんです。でも、一番やってはイケナイことをするのは快感なんです。気持ちがいいんです。戦争で殺されることさへ気持ちいいと思ってるんです。

キャロル・ハリスン あなたは、ほんとうの戦争を知らないから、そんなことがいえるんですよ。

ベーカー・レイン あなたは知ってらっしゃるの。

キャロル・ハリスン (コトバに詰まった)

ベーカー・レイン 悪魔にどうして尻尾があるのか御存知？

キャロル・ハリスン 悪魔の尻尾。

ベーカー・レイン あれはね、戦争の象徴。なくてもいいものが在って、それで悪魔が悪魔として成立してるから。

キャロル・ハリスン あなた、戦争で、誰か身近なひとを亡くされたの？

ベーカー・レイン 私はね、神さままっと思うの。何でなら悪魔ルシフェルの存在を信じているから。ねっ、私の理屈って逆なの。神さまがいるから悪魔もいるだろうじゃないの。悪魔の存在を信じているから、それならば、神さまがいてもおかしくはナイと、そう思ってるの。

キャロル・ハリスン ベーカー・レイン、あなた、

ベーカー・レイン (キャロル・ハリスンのコトバを遮って) やっぱり傘をとってきましょう。(去っていくが、振り向いて) キャロル・ハリスン、花は神など信じてはいません。おそらく、鳥ですら。

半ば呆然と、ベーカー・レインの後ろ姿をみつめるキャロル・ハリスン。

ここで、少し時が進む。

雲の流れの中に、キャロル・ハリスンは佇んでいる。

雨があがったようだ。

ハンス・トルフが来た。

ハンス・トルフ お昼ごはん、食べないのかい。早くいかないと無くなっちゃうよ。

キャロル・ハリスン そうね。

ハンス・トルフ ブレンド・デイは、まだ食ってる。あいつ、大食いなんだ。

キャロル・ハリスン そう。

ハンス・トルフ 雨があがったから、森を捜してみるよ。

キャロル・ハリスン えっ。

ハンス・トルフ 婦長さんだよ。

キャロル・ハリスン ああ、ありがとう。

ハンス・トルフは、キャロル・ハリスンをじっとみつめる。

キャロル・ハリスン どうか、した？

ハンス・トルフ 僕ね、あなたをみたことがあるんだ。夢かもしれないけど、あいにくぼくの病気は無眠症といって、24時間眠らない病気なんだ。それで、ここの人々がみな眠っている時、そう、ちようど冬眠の途中でふいに覚めてしまった一匹の小さな動物のように、目を凝らして周囲をみていた。そうしたら、キャロル・ハリスンさん、あなたが立っていた、そんな気がするんだ。

キャロル・ハリスン でも、私はここは初めてよ。

ハンス・トルフ だよ。何かの思い違いだよ。

キャロル・ハリスン たぶん、そうだと思うわ。

おじさんとおばさんがやって来た。

おばさん お食事は？

キャロル・ハリスン はい、何だか食べたくなって。

ハンス・トルフ 僕はもう済ました。

おばさん (空をみて) 良かった、雨があがったね。

おじさん ほんとだ。洗濯でもするかい。

おばさん いいや。他に私には私の役目があるからね。

おじさん ああ、そうだったね。

おばさん キャロル・ハリスン、適当なところに座りな。

キャロル・ハリスン 何か。

おばさん まあ、座りな。話しておかなくちゃいけないことがあるんでね。

キャロル・ハリスン わかりました。

キャロル・ハリスンは、傍らの立方体を持ってきて、座った。

おばさんも、立方体に腰掛けた。ハンス・トルフは立ったまま。おじさんはしゃがんで

また蟻の巣でも捜しているのだろうか。

おばさん 戦争があったんだよ。

キャロル・ハリスン 戦争。

おばさん この国と、隣の国とのあいだでね。さつきここにいたベーカ・レインは許嫁を兵隊にとられて、戦死されている。愛しあったのにねえ。

キャロル・ハリスン そうでしたか。可哀相に。

おばさん ここは、平和な精神治療院だった。ところが、敵国の軍隊がここにも押し寄せるといいうので、医者と看護婦は患者を見捨てて、みな逃げてしまった。残されたのは患者と私たちだけだ。

おじさん ああ、そうなんだよ。

おばさん ところが、敵の兵隊は結局来なかった。別のルートを素通りしただけだったんだ。

おじさん こなかったなあ。

キャロル・ハリスン (やや、不思議そうな表情で) その戦争は、終わったんですか。

おばさん さあ、ワカラナイ。終わったのか、まだ続いているのか、どっちが勝ってどっちが負けたのかワカラナイ。ただ、オハラ財団の援助は不思議なことにまだ続いている。だから、私たちは暮らしていける。医者や看護婦がもどつてこないところを見ると、みんな殺されたのか、それとも、この国が相手の国に占領されているのか。その理由はワカラナイ。しかし、ここは見捨てられたことだけは確かな事実だ。

キャロル・ハリスン そうだったんですか。初めて聞きました。初めて・・・えっ、どうして私、そんな大事なことを初めて聞いたんでしょう。

おばさん 声が聞こえるだろう。

キャロル・ハリスン 声。

おばさん 貴女の脳裏に囁く声さ。

キャロル・ハリスン (驚いて) えっ、ええ。でも、

おばさん 典型的な分裂症の症状だねえ。

キャロル・ハリスン 分裂症。

おばさん キャロル・ハリスン。貴女が、ここに来たのは初めてではナイ。

キャロル・ハリスン えっ。

おばさん 貴女は、何度も何度もここに来ているんだ。

キャロル・ハリスン どういうことですか。

おばさん 新任の看護婦として、貴女は、何度もここに来ている。そうして、それを完璧に忘却して、しばし、眠り、また荷造りをして、ここに、来るんだ。

キャロル・ハリスン 何の話でしょう。

おばさん 何故だかはワカラナイ。他の患者はみな貴女のことを忘れて、貴女が何度ここに来て、初めてのように口をきく。ただ、ハンス・トルフは病気のせいだろうけど、貴女のコトをうっすらと覚えているんだ。

ハンス・トルフ やっぱり、僕、出会ってるんだよね。

おじさん ああ、そうだよ。もう、何十ぺんも出会ってる。

キャロル・ハリスン あの、じゃあ、私はこの患者のひとりだと、そうおっしゃるのですね。

おばさん ああ、そうだよ。毎度、私がそれを貴女に教えている。

キャロル・ハリスン 婦長も逃げたんですか。

おばさん 婦長は殺された。

キャロル・ハリスン 殺された。

おばさん ああ、キャロル・ハリスンに殺された。

キャロル・ハリスン 私に。私が婦長を殺した？

おばさん そう。

おじさん 信じられないだろうけど、そうなんだ。

キャロル・ハリスン 何の理由で。

おばさん 女王は二人もいらぬという理由でさ。

キャロル・ハリスン ワカラナイ。何の話をされているのかワカラナイ。

おばさん あんたたちは、チェスをしていたんだ。婦長の部屋でね。それは、いつものことさ。よく、

貴女たちはチェスをしていた。

おじさん あんたは黒の駒を持っていたんだ。

おばさん 婦長は白。

キャロル・ハリスン それで。

おじさん あんたはね、自分を黒の女王だといひ張って、白の女王である婦長さんを傍らのナイフで

刺したんだ。

おばさん 私にも責任はある。私はちょうど、その果物ナイフで林檎を剥いてあげてたのさ、二人にね。

おじさん 俺が悪いんだ。ちよつとした用事で、こいつ（おばさんを顎でしゃくる）を呼んだんだ。

おばさん 私は、その場を離れた。そうして惨劇が起こったんだ。

キャロル・ハリスン そんなこと、急にいわれても、信じられない。

おばさん そりやそうだろう。私だって、いいたかない。しかし、これはどうも私の役目らしくてね。

貴女に真実を知らせるのは、いつも私なんだ。私は、その果物ナイフの負い目のために、貴女に

こうして、いつもほんとうのことを喋っている。もう、何度も何度もだよ。キャロル・ハリスン。

キャロル・ハリスン （しばし沈黙考していたが）しかし、もし、

おばさん なんだい。

キャロル・ハリスン 狂っているのが私ではなく、おばさん、あなただったら、どうなるんだろうと、

そんなことを考えてました。

おじさん 俺たちが患者だというのかい。

キャロル・ハリスン そうです。

おばさん ああ、そういう考え方も出来るだろう。（ポケットから何やら小さなメモを取り出した）

それを読む）　く我が夏はいまも終わらずパティオにて永劫回帰のドレスをまとう）

キャロル・ハリスン 何ですかそれ。

おばさん 貴女の書いた歌だよ。（キャロル・ハリスンに紙片を渡す）

キャロル・ハリスン （それをみて）

おばさん 貴女の筆跡だろ。

キャロル・ハリスン これは、何処に。

おばさん 貴女が私にくれたんだ。

キャロル・ハリスン そんな。

おばさん これで、私の話を信用する気になったかい。

キャロル・ハリスン 我が夏はいまも終わらずパティオにて永劫回帰のドレスをまとう。おじさん

婦長さんの墓は、森にある。なんなら、みにいくかい。

キャロル・ハリスン いえ。

おばさん まっ、そういうことさ。

キャロル・ハリスン もし、それが事実なら、私は、私は差し当たってどうすればいいのかしら。
おばさん 貴女の部屋に案内してあげよう。そこで、眠るんだね。

キャロル・ハリスン 私の部屋。

おばさん そう。この治療院の貴女の病室だ。

おばさんが立ち上がった。キャロル・ハリスンも立ち上がろうとした。

と、ハンス・トルフが突然。

ハンス・トルフ 違う。そうじゃないよ、キャロル・ハリスン。

キャロル・ハリスン えっ。

ハンス・トルフ 婦長さんを殺したのはあんたじゃない。

キャロル・ハリスン どうしたの。

ハンス・トルフ 僕、思い出した。婦長さんが殺されたと聞いて思い出したよ。婦長さんを殺したのは、ここにいるおじさんとおばさんだ。そうだ僕はみていたんだ。医者と看護婦が逃げ出した時、婦長さんだけは、残ろうとしたんだ。それで、何があったのかワカラナイけど、おじさんとおばさんと婦長さんが喧嘩になって、

おばさん 庇っているんだよ、キャロル・ハリスン、貴女をね。この子は、いつもそういうんだ。でも、そんな嘘は、何の助けにもなりはしない。

ハンス・トルフ 違うよ、ほんとだよ、キャロル・ハリスン、信じてくれよ。

と、スー・ルーがやってきて、通り過ぎ・・・はしないで、初めて立ち止まってキ
ヤロ
ル・ハリスンを見た。

スー・ルー オハラ財団のスー・ルーと申します。貴女キャロル・ハリスンさんですね。ここに今日
赴任して来られた、新任の看護婦さんですね。

キャロル・ハリスン えっ、ええ、そうです。

スー・ルー 婦長をお捜しと聞きました。婦長なら、私どもの別荘におります。あそこにあるあの建
物ですよ。(と、さらに上の山の中腹を指さした) ジャズが聞こえてきているでしょう。あそこ
です。彼女ですよ、ジャズなんてのを聞いているのは。

急速に溶暗する。

薄明かりの中、キャロル・ハリスンが旅行鞆を下げて、パティオの入り口に立っ
歩き始める。 ている。

誰かがチェスでもやっていたのだろう、途中まで闘われたチェスが、立方体の上
に載っ
ている。その傍らに、ウイスキーの空きビンが転がっている。

しばし歩くと、白衣が脱け殻のように捨ててある。

それから、如雨露が隅に転がっている。

そこまで、キャロル・ハリスンは歩を進めた。

声 また、やってきたね、おまえの記憶が。

キャロル・ハリスン（ココロの声） ここは何処です。

声 セント・オハラ精神治療院だったところだ。

キャロル・ハリスン（ココロの声） だった、とは？

声 戦争で何もかも崩れてしまった。

キャロル・ハリスン（ココロの声） ここも犠牲になったんですか。

声 そうだよ。

キャロル・ハリスン 私は？

声 おまえはただひとり、生き残った、この看護婦だった。

キャロル・ハリスン（ココロの声） これは、いま私のみているこれは、現実ですか、それと

も。・・・何故私はいまここにいるのです。

声 これは、おまえの記憶だよ。

キャロル・ハリスン（ココロの声） あなたは、私に囁きかけるあなたはナニモノなんですか。神さ
まですか。

声 神さまというのは、不思議なものだねえ。ひとというのは悲しいものだ。不思議なものが悲しい
ものを産み出したんだねえ。それはとても残酷な物語だ。なにしろ、時の流れの中に放り出され
ただから。不思議、悲しみ、そうして残酷、世の中にあるのはそれだけだといってもいい。

キャロル・ハリスン あなたは誰。

声は答えない。

キャロル・ハリスン あなたは誰、真実はナニ！

声は答えない。

キャロル・ハリスン 私はいま、目覚めているの。それとも眠っているの。そうして、目が覚めたら、

またここに、新任の看護婦として、赴任して来るの？

キャロル・ハリスンの視線の先に、ハンス・トルフが現われた。

キャロル・ハリスン ハンス、ハンス・トルフ。

以下、おじさん、おばさん、クエスト・エル、ベーカー・レイン、ブレンド・デイ、マン・バクシー、ライト・ユーン、ヤマモト、スー・ルーと、次々にひとびとが前方に現われて、黙ってキャロル・ハリスンをみつめて立っている。

キャロル・ハリスン あの、婦長さんは何処にいらっしゃいますか。

遠くからジャズが聞こえてきた。その方向をなんとなくしにみなさんが観る。つらうにして、キャロル・ハリスンも、そっちを観た。れるよ

キャロル・ハリスン 私の仕事というのは何かしら。

終演

20040404